

建築の教え

第十一回

前回では、世の中で環境意識が高まるにつれ、居心地が呼び起こされてきた、環境を身近なものにするのが居心地ではないか、と述べた。

環境意識と居心地がセットになって

いる。
身近な「具体的な生活空間(場所)」が環境であるというのは、どんなに離れた環境の問題も身近であるといっているのに等しい。

そのことを後押ししているのが、私たちのなかにある、殆ど無意識に近い、「住み家」の感覚なのではないか。

するためには、包囲の《箱》はそれなりの構えが必要であった。

こうして《箱》をもち、包囲された内部が生まれる。しかしそれはあくまで、安心でき、ほっとし、ぬくもりのある内部を持ちたいがためである。

発生の第二(これをBとする)は、人類が太古、まわりをつつむ環境をつかさどっているらしい「偉大なるもの」を天の上に、あるいは大地にみとめ、そこに向かって交信しようと、はたらきかけていた。祈り、願い、鎮め、感謝をした。それを物的なもので形に表した。地上に立てば、天と地の軸、いわば上下方向に意識は向き、そのように形に表れた。それは主に思いを形にのせるといって、とても象徴的なものになる。それが《箱》の外側を考えることにつながり、建築物の外側の意匠へと発展していった。

これら二つの動機があつて、それが

居心地は「居るところの心地」あるいは「住み心地」であつたのであるから、「住み家」の心地は、さしあつての居心地である。

それは内部にあつて「包み込まれる」感覚と結びついている。建築物がそのために大いに役立ってきた。

ここでいう建築物は建物でもない。精神的なブラスアルファを加えたものが建築物と考えられる。

芸術性や聖性などを加味した建物が



え・安原喜秀

連続と続き、そこからいろいろのもの

が派生してきた一方、そのAとB、つまり内部と外観、二つが一つになって、私たちが考える建築物にできあがつてきた、と建築の専門家からは言われる。《箱》の使い方に、とくに社会性をもつた多様なものが生まれ、変化し、それに応じてさまざまな建築物が出現してきた。宗教建築、王宮、大学、駅、銀行、百貨店、などなど、みんな

建築物である。またときに心を加えたものでもある。

それをつくるのが建築。ただし、そうした建築物を建築といってしまうことも普通である。

建築物で人間が大昔からなにをやっていたか。

大きく二つの動機から始まったと考えられている。

建築物の発生の第一(これをAとしよう)は、身を寄せ合いながら少しでも安心して家族集団が生きていく、寝られるようにする場所をつくることであつた(寝ているときほど無用心なことではない)。

つまり「住み家」である。そのための空間を樹上であつたり、洞窟や地下の穴をみつけ、自分達を包囲する、言つてしまえば《箱》を組み立てたり、覆つたりしてきたのである。とくにその危険がある外敵からの攻撃にそなえ

しかし人間が生活するかぎりAはなくなることはなく、「住み家」という包囲の《箱》、その《箱》が包み込んだ内部を持ち続けている。

それどころか、絶えず、どんな建築物にもこのAの要素が表になり陰となつてつきまとつている。

インテリアとよばれる内部性を示す重要な仕事領域がそれである。

通常、建築物が内部をつくり、居心地をもたらず、と考える。が、本来は居心地のために建築物が求められているのではないかと、ふたたびこのAを思い起こしたほうがよい時代にいるのかもしれない。

そうしたとき、居心地がまず建築に望んでいたのは、内部性であり、包み込む「包摂性」だったといえる。建築は大いにそれにこたえようとしてきた。そのお陰で、居心地にはこの「包摂性」がより確かなものになってきたのではなかったか。